キヤ 21–100

戦戯省

基礎野戦教範

兵士必携虎の巻

翻訳 ver.1.0e

ENCYCLOPEDIA

これ以降はゲームで使う主要車両および兵器システムのクイックレファレンスである。簡単なものであるが研究の第一歩として読むのが良いであろう。興味ある方は、もっと詳細なものが印刷やネットで無数に見つかる。

UNITED STATES ARMY

TANKS

M5A1 LIGHT TANK (W/RHINO)

M5軽戦車は、米国が戦争突入に先立つレンドリースの下で英連邦部隊に供給されたM3軽戦車の派生型である。英軍はこの戦車を「スチュアート」と呼んでいた。

M5A1の特徴はツイン・キャデラックエンジンである。溶接車体に傾斜した前面装甲－垂直から20度－、隆起したエンジンデッキ、後部に張り出して無線を格納した砲塔。これが1943年までの米軍軽戦車の主要な変更点である。

装甲……13-51mm
ライノ装置…1944年7月

M4 SHERMAN (MID)

M4シャーマンは、正式にはM4中戦車で第二次大戦で米軍が使った主要戦車である。設計者は機械的信頼性、生産とメンテナンスの容易さ、耐久性、部品と弾薬の標準化、適切な大きさと重量に悩まされた。

シャーマンの信頼性は1930年代の米軍軽戦車で最初に開発した多くの機能から得られたものである。垂直渦巻きスプリング式サスペンション、ラバーキャタピラ、前部にドライブスプロケット、後部にラジアルエンジンを搭載が挙げられる。設計目標は、優れた生産効率、高い信頼度、歩兵支援の突破攻撃能力を提供し、枢軸国のいかなる戦車をも撃破することであったが、ドイツで開発されたより大型の戦車には力不足だった。

シャーマンは約5万台が第二次大戦中に生産され、生産中や戦場でもさらなる修正がなされ、多数の形式があり、主たる変更は必ずしも一直線の改良ではなく、M4A3はM4A1より必ずしも良いとは言えない。サブタイプは標準生産型を示していて、主要な変更点はエンジンや車体である。中期生産型M4シャーマンの主な特徴は次のとおりである。

75mm主砲、砲弾97発
動力旋回砲塔
シャイロスタビライザー
戦車長ハッチ周辺に360度旋回可能な50口径重機関銃。
400馬力エンジン
最大速度：39km／h
戦車長用観音開きハッチ
装弾手ハッチなし
屋根搭載煙幕弾12発入り煙幕発射装置
装甲板の製造品質は全体的に凡庸
傾斜装甲版（上部車体装甲）は50.8mm厚、角度56度
車体前面（下部車体装甲）は丸味を帯び、50.8mm厚

■ M4 Sherman (Late) (w/Rhino)

M4後期型の、M4中期型との相違点は以下の通りである。
……装甲板の製造品質は全体的に良好。
……車体前面下部が傾斜になった
ライノ装置…1944年7月

■ M4(105) (Early) Sherman (w/Rhino)

M4(105)初期型の、M4後期型との相違点は以下の通りである。
……主砲が105mm、砲弾66発
……人力旋回砲塔
……ジャイロスタビライザーなし
……460馬力エンジン
……簡単な装填手用ハッチあり
……装甲板の製造品質は全体的に普通。
……傾斜装甲版（上部車体装甲）は63.5mm厚、角度47度
……車体前面（下部車体装甲）は、101.6mm厚に増加
ライノ装置…1944年7月

■ M4(105) (Mid) Sherman

M4(105)中期型の、M4(105)初期型との相違点は以下の通りである。
……50口径重機関銃が移動して砲塔の中央後部のピントルマウントに固定
……戦車長のキューポラが単純な分割ハッチに置き換えられた。
……主砲にジャイロスタビライザー追加
使用可能時期……1944年7月

■ M4A1 Sherman (Mid)

M4A1中期型の、M4中期型との相違点は以下の通りである。

……75mm主砲の砲弾90発

……鋳造装甲による明らかに「丸い」外観（丸められたのではない）

■ M4A1 Sherman (Late) (w/Rhino)

M4A1後期型の、M4A1中期型との相違点は以下の通りである。

……装甲板の製造品質は全般的に良好

……車体前面下部が傾斜になった

ライノ装置……1944年7月

■ M4A1(76W) (Early) Sherman

M4A1(76W)初期型の、M4A1後期型との相違点は以下のとおりである。

……主砲が76.2mmとなり砲弾搭載数が71発となった。

……460馬力エンジン

……「湿式」弾薬庫で内部火災の確率が減った

……50mm対空機関銃用が装填手ハッチについた

……戦車長キューポラが単純な分割ハッチに代わった

……装填手ハッチの分割ハッチがついた

……装甲板の製造品質は全体的に普通

……傾斜装甲版（上部車体装甲）は、63.5mm厚、角度47度

……車体前面（下部車体装甲）は、101.6mm厚に増加

■ M4A3 Sherman (w/Rhino)

M4A3の、M4中期型との相違点は以下の通りである。
……500馬力エンジン
……最大速度：42km／h
ライノ装置…1944年7月

■ M4A3(75W) (Early) Sherman (w/Rhino)

M4A3(75W)の、M4A3との相違点は以下の通りである。
……75mm主砲弾が104発
「湿式」弾薬庫で内部火災の確率が減った
……装填手ハッチの分割ハッチがついた
……装甲板の製造品質は全体的に普通
……傾斜装甲版（上部車体装甲）は、63.5mm厚、角度47度
……車体前面（下部車体装甲）は、101.6mm厚に増加
ライノ装置…1944年7月

■ M4A3(75W) (Mid) Sherman

M4A3(75W)中期型の、M4A3(75W)初期型との相違点は以下の通りである。
……50mm対空機関銃用が装填手ハッチについた
……戦車長キューポラが単純な分割ハッチに代わった
使用可能時期……1944年7月

■ M4A3(76W) (EARLY) SHERMAN

M4A3(76W)の、M4A1(76W)との相違点は以下の通りである。
……標準型車体で、M4A1の丸みを帯びた姿ではない。
……500馬力エンジン
……最大速度：42km／h
……煙幕弾を18発搭載

■ M4A3(105) (EARLY) SHERMAN (W/RHINO)

M4A3(105)初期型の、M4(105)初期型との相違点は以下の通りである。
……500馬力エンジン
……最大速度：42km／h
……煙幕弾を15発搭載
ライノ装置…1944年7月

■ M4A3(105) (MID) SHERMAN

M4A3(105)中期型の、M4A3(105)初期型との相違点は以下の通りである。
……50口径重機関銃が移動して砲塔の中央後部のピントルマウントに固定
……戦車長のキューポラが単純な分割ハッチに置き換えられた。
……主砲にジャイロスタビライザー追加
使用可能時期……1944年7月

■ Tank D

■ M10 GMC Tank Destroyer (w/Rhino)

M10駆逐戦車は、制式名称を3インチGunMotorCarriageM10といい、M4シャーマン戦車の車体を基にした米軍の駆逐戦車である。車両数的に第二次世界大戦中で最も重要な米軍の駆逐戦車であり、旋回砲塔に強力な対戦車砲をうまく組み合わせている。M10の砲塔は前部1/3の部分的な屋根しかない。これにより脆さは明らかに増大したが、より良好な視界が得られ、武器の操作も容易になっている。

もっと強力な代替戦車も導入されても、終戦まで現役のままだった。

英軍では「Wolverine」と命名されている。

装甲……9～57.2mm

ライノ装置……1944年7月

■ M10 GMC Tank Destroyer (Late)

ゲームでは、後期型と標準型の違いは弾薬搭載量だけである。後期型は２発の得難い76mmM93HVAP（タングステン）弾を積載していた。この弾丸はタングステン徹甲芯があり周りを軽量の筐体で包んでいて、高初速と貫通力が増した。

使用可能時期……1944年8月

■ Self-propelled Assault Guns

■ M8 Howitzer Motor Carriage

75mm自走榴弾砲M8は、時にはM8スコットとして知られている米軍の自走榴弾車両であり、M5軽戦車の車体で開発さ

れた。その武装は、新オープントップ砲塔に装備した75mmM2榴弾砲（後に75mmM3榴弾砲）でM1A1山砲の再生品である。
装甲……9.5～44.5mm

■ M7B1 HMC Priest

105mm自走榴弾砲M7は米軍自走砲で制式名称は105mm榴弾自走砲である。英軍は、機関銃座の形が説教壇に似ていたので、「プリースト（聖職者）」と呼んでいた。

最初に生産されたM7はM3リー中戦車を改造したが、M3をベースにしたものからM4シャーマンともっと共通性をもたせたものにかなり急速に変わっていった。最初の主要例はM4の3ピースギアハウジング、一体鋳造、サスペンションを採用したことである。後にM7B1はフルにM4A3シャーマンの車体を元にした。それが標準化されたのは1943年9月である。
装甲……51mm

■ Armored Cars

■ M8 Armored Car (Early)

M8軽装甲車は装輪式6×6駆動で、第二次世界大戦中にフォード自動車が生産した。英軍により「グレイハウンド」と名づけられたM8は1943年に実戦配備された。基本的に米軍騎兵偵察部隊の指揮統率戦闘車両として用いることを目的としていた。M8グライハウンドは文字通り、どこへでも行き、前進する米英軍にとって大きな支援となった。
装甲……最大19mmまで

■ M8 Armored Car (Mid)

M8軽装甲車のサスペンションに改良が加えられた、後のモデルである。

M20 Scout Car

M20汎用装甲車は、M20スカウトカーとも言われているが、M8軽装甲車（グレイハウンド）の砲塔を取り除き、低く装甲が施されたオープントップ構造と対空50mmM2重機関銃用の円型銃座に置き換えたものである。M20は主として指揮車両および前進偵察として用いられたが、兵員輸送車や貨物輸送車としても多く使われた。に小火器や銃弾に対する適度な防御力とあいまって、高速と優れた機動性を提供した。指揮車として用いられた時には、M20に無線機器が追加された。
装甲……最大19mmまで

Halftracks

M2A1 Halftrack

ホワイトハーフトラックはホワイト160AXエンジンを搭載していた。M2HB機関銃用に装着したスケートレール銃座は前部右座席のM49機関銃円型銃座に改良。戦場ではしばしば7.62mmM1919機関銃用も加わって３つまで銃架を装着していた。

M3 Halftrack

M3ホワイトハーフトラックはホワイト160AXエンジンを搭載していた。M32対空機関銃架か、銃脚を装着。ゲーム中では、M2HB機関銃とM1919A4機関銃の両方がある。
装甲……6-12mm

■ M3A1 Halftrack

どの車両にも前部右座席に改良したM49機関銃円型銃座をつけるように設計したのがM3A1である。1942年と1943年の間に、M3ハーフトラックの全て（標準型およびA1型）は常に改良された。動力伝達系統、エンジン、積載量等、改良は多いである。ゲーム中では、１ないし２丁の機関銃を搭載している。
装甲……6-12mm

■ M4A1 Mortar Halftrack

M2ハーフトラックを基にした自走迫撃砲でM1迫撃砲（81mm）を装備していた。この迫撃砲は車両から降ろして射撃するようになっていたが緊急時には車両内部から後方に射撃することもでいた。A1は迫撃砲を前向きに固定し車両内から射撃することがでいた。特徴として30口径M1919軽機関銃が360度スケートレールに搭載されている。
装甲……6-12mm

備考：M4A1もしくはM21ハーフトラック内からの迫撃砲射撃は現在のところCM:BNではできない。

■ M21 Mortar Halftrack

M4自走迫撃砲シリーズに不満があったため、兵器局は1943年に、M1迫撃砲（81mm）を当時生産中のM3ハーフトラックに搭載させる要求書を出した。最終的に、30口径M1919軽機関銃に代わって円柱銃架50口径M2重機関銃が装備された。
装甲……6-12mm

■ Unarmored vehicles

■ 2.5 tons 6x6 Cargo Truck

この車両は、WW2で使われた典型的な2.5トン6x6米陸軍輸送トラックを表している。「2.5」とよく言われるが、これは戦争中に2.5トントラック全般に当てはめた用語である。ゲーム中では、オープントップやキャンバスカバーを装着したものが出てくる。

■ 1/4 ton 4x4 truck "Jeep"

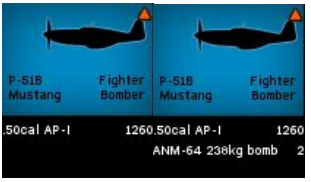
ウィリーMB米陸軍ジープ(正式には1/4トン 4x4トラック)とフォードGPWは1941年から1945年まで製造された。小型四輪駆動多用途車両は第二次世界大戦ジープのシンボルと考えられ、多くの類似軽多用途車両のきっかけとなっている。

ゲーム中では、無線機の有る無し、中型機関銃の有る無しのいくつかの型がある。

U.S. Air Assets

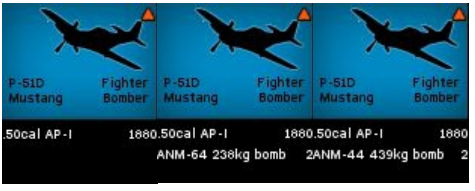
P-51B Mustang Fighter Bomber

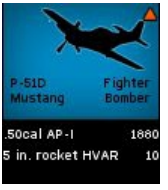
ノースアメリカン航空P-51ムスタングは長距離単座戦闘機だった。経済的生産に加えて、ムスタングは速く、高品質でかなり耐久度のある航空機である。
武装……機銃掃射、小型爆弾



P-51D Mustang Fighter Bomber

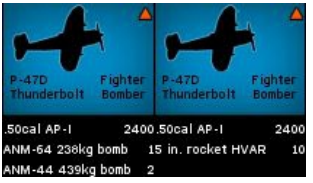
P-51の決定版であるP-51Dは、ロールスロイスの伝説的なパッカードV-1650二段二速過給機マーリンエンジンを得て、50口径12.7mmM2ブローニング機関銃六丁を備えていた。
武装……機銃掃射、小型爆弾、大型爆弾、ロケット少数
使用可能時期……1944年7月最大、ロケット





P-47D Thunderbolt Fighter Bomber

リパブリック航空のP-47サンダーボルトは「ジャグ」としても知られ、歴史上最も大きく、重くそして高価な単発レシプロエンジン戦闘機である。第二次世界大戦中の米陸軍航空機(USAAF)の主力の一つだった。P-47は空中戦にたいへん有効だったが、地上攻撃に特に卓越していた。50口径機関銃八丁、片翼に四丁積んでいた。全部搭載した時にはP-47は8トンにもなった。
武装……機銃掃射、小型爆弾、大型爆弾、ロケット(使用可能時期1944年7月)



■ U.S. Artillery Assets

備考：60mmM2および81mmM1迫撃砲は「重火器」で説明する。

M2 4.2 inch Mortar

M2 107mm迫撃砲は米軍でライフリング迫撃砲第二次世界大戦および朝鮮戦争で使われた。実戦配備は1943年である。
発射速度……20分間では5発/分
……長時間では1発/分

M1A1 75mm Pack Howitzer

75mmM1A1榴弾砲は、困難な地形でも移動できる砲兵部隊の需要を満たすために1920年にアメリカで設計された。砲および砲架は分解して駄載できるように設計されている。
発射速度……3-6発/分

M2A1 105mm Howitzer

105mmM2A1榴弾砲は第二次世界大戦での米国の標準的野戦軽榴弾砲だった。

M3 105mm Howitzer

105mmM3榴弾砲は空挺部隊で使用するように設計された米国の野戦軽榴弾砲だった。105mmM2A1榴弾砲の砲身を短縮化し、75mm榴弾砲用のM3開脚式砲架を少し修正したものを装着した。
発射速度……4発/分、緊急時
……2発/分、持続的

M1 4.5 inch Gun

M1 4.5インチ砲は第二次世界大戦開始時に米国が開発した野戦砲である。155mmM1榴弾砲と同じ砲架を共有し英国のBL 4.5インチ野戦砲と同じ弾薬を発射する。
発射速度……4発/分、緊急時
……1発/分、持続的

M1 155mm Howitzer

155mmM1A1砲は米陸軍で使用された牽引式榴弾砲である。中級砲兵部隊用として1942年に生産が始まった。
発射速度……4発/分、緊急時
……40発/時、持続的

M1A1 155mm Gun “Long Tom”

155mmM1砲は、ロングトムとして広く知られ、第二次世界大戦と朝鮮戦争で米陸軍で使用された155mm口径野戦砲である。M1A1(1941)は、砲尾栓を改良したことが特徴である。
発射速度……40発/時

M1 8 inch Gun

8インチM1砲は米陸軍で開発された203mm牽引式重砲である。

M1 8 inch Howitzer

8インチM1榴弾砲は元々ドイツ軍17cmK18砲に対抗するために第二次世界大戦中に開発された。
発射速度……30発/時

M1 240mm Howitzer

240mmM1榴弾砲は、「ブラックドラゴン」というニックネームがついている米陸軍が使用した牽引式榴弾砲である。240mmM1榴弾砲は第一次世界大戦時代の240mmM1918榴弾砲が第二次世界大戦時には時代遅れとなっていて、更新のために設計された。240mm榴弾砲は米軍野戦砲兵部隊が第二次世界大戦で展開した最も強力な兵器であり、160kgの榴弾飛翔体を23km先に発射でいた。海岸砲のレイルガンを除くと戦争中で米陸軍が用いた最大の野戦兵器である。この兵器は堅固に強化された目標を攻撃できる超重野戦砲の要求に対処するものだった。
発射速度……30発/時

T27 Xylophone Rocket

T27は米軍が初めて使用した複数ロケット発射機である。4.5インチM8ロケットの発射管が8本並ぶ構造だった。2.5トン重トラックの後部に設置することを目的としていた。

T27E2 Xylophone Rocket

8本の代わりに24本のロケット発射機を装備したシロフォンの発展型である。名字は「Honeycomb（ミツバチの巣）」である。戦争終結まで元々のT27 と置き換わっていった。

T34 Calliope

ロケット発射機T34(カリオペ)は米陸軍が第二次世界大戦で使用した戦車搭載複数ロケット発射機である。本発射機はM4シャーマン中戦車の上部に設置され60本の発射管から114mmの弾幕を射撃した。1943年に開発され、少数が生産されて、1944-45年の様々な米軍装甲部隊が用いた。楽器の「カリオペ」がその名称の由来である。
使用可能時期……1944年8月

■ Naval guns

ゲーム中では米軍の支援として多数の海軍砲が使える。沿岸に様々な艦船がいると表している。駆逐艦の５インチ砲、軽巡洋艦の６インチ砲、重巡洋艦の８インチ砲、戦艦の12インチ砲。戦艦の14インチ砲は1944年6月のみ使用可能である。

■ U.S. Weapons

■ M1911A1 .45 cal

自動ピストル45口径M1911A1はシングルアクション、セミオートマティック、マガジン装填、45口径ACPカートリッジを使用するリコイル操作チャンバーの拳銃である。ジョン．M．ブローニングが設計した小火器で第二次世界大戦中の米軍の標準武器だった。M1911A1は第一次世界大戦のM1911モデルにマイナーチェンジを数回行ったものである。
カートリッジ……45口径
装弾システム……着脱可能な標準ボックスマガジンに7発

■ M1 Carbine

米軍M1カービン銃は軽量セミオートマティックカービンである。威力の低い30口径は、元々歩兵戦闘の主要火器として用いることを目的としていないため、戦争後期に開発されたもっと強力な突撃銃と比較できない。それにもかかわらず、本カービン銃は歩兵将校、空挺部隊、下士官、弾薬運搬員、前進観測員、それに他の前線部隊にすぐに広まった。前線での戦闘における評判は様々である。何人かの兵士や海兵隊、特に主要火器としてフルサイズのライフルを使えない者は、小さなサイズと軽量さで本カービン銃を好みた。
カートリッジ……30口径
装弾システム……着脱可能なボックスマガジンに15もしくは30発

■ M1A1 Carbine

M1カービン銃の空挺部隊モデルで折りたたみ式銃床、15発マガジンになっている。

■ M1 Garand

米国ライフル銃、M1ガーランド銃30口径はいかなる国の歩兵よりも先駆けて一般導入された初のセミオートマティックライフル銃である。M1ライフル銃はガス圧動作、セミオートマティック、クリップ装弾の特徴があった。M1のセミオートマティック動作は米軍にかなりの火力優位をもたらし、戦闘中の個々の敵歩兵に速射性で勝っていた。
カートリッジ……30-06スプリングフィールド（7.62mmx63mm）
有効射程……402m
装弾システム……8発入りエンブロック・クリップ装弾方式

■ M1 Garand (w/ M7)

ライフルグレネードランチャーM7はM1 ガーランド銃用の22mmグレネードランチャーアタッチメントである。M7は筒型の器具で、片方の端はライフル銃身に覆いかぶさり、もう片方は榴弾を保持する部分である。グレネードを発射するときには一発だけ空包を装填する。射撃時にカートリッジによって生まれたガスが伸展して榴弾をかなりの力で前方へ推進させる。M7は榴弾を350mまで発射できた。
榴弾、徹甲弾、煙幕弾がM7で使えた。

■ M1903A1 Springfield

米軍ライフル銃、30口径M1903は5発クリップ給弾、ボルトアクションの制式銃である。正式に米軍の軍用ボルトアクションライフルとして採用されたのは1905年6月21日で、第一次世界大戦では現役であり、第二次世界大戦ではM1903A3とM1903A4に改修されていた。1937年、M1ガーランド銃が米軍標準ライフルとしてスプリングフィールド銃から置き換わったがM1の供給が限定があったため、スプリングフィールドは第二次世界大戦中も歩兵用標準および狙撃用特殊ライフルとして現役にとどまった。M1903A3は、銃身にあった後部照準が、M1ガーランドの後部照準のように銃床に載せられた孔照門に変更された。
カートリッジ……30-06スプリングフィールド
作動方式……ボルトアクション
装弾システム……5発

■ M1A1 Thompson

　トンプソンはジョン．T．トンプソンが発明した米軍Mサブマシンガンである。トンプソンは「トミーガン」としても非公式に知られている。トンプソンは、人間工学的、コンパクトさ、大型.45ACPカートリッジ、信頼性、そして多量の自動射撃のために兵士、犯罪者、警官たちに好まれた。
　1938年、米軍はトンプソン・サブマシンガンを採用した。米軍サブマシンガン45口径M1A1は初期型の半分の時間で、かつ、かなりのコストが低下した。
カートリッジ……45ACP（11.43<>23mm）
有効射程……50m
装弾システム……20発入りスティック／ボックスマガジン
……30発入りスティック／ボックスマガジン
……50発入りドラムマガジン

■ M3 Grease Gun

　M3 グリースガンは、米軍の45口径サブマシンガンで、1942年12月12日に米陸軍に制式採用され45口径トンプソンシリーズとの更新が始まった。M3 グリースガンは、トンプソンよりもっとコストパフォーマンスが良いように、大量生産向きに設計された。M3 グリースガンは、「グリースガン」と呼ばれるが、それは一般的な機械工具に外観が似ているためである。
カートリッジ……45ACP、9x19mmパラベラム弾
有効射程……照準設定は91m(9mm弾)、50m(45ACP弾)
装弾システム……30発入り着脱可能ボックスマガジン

■ M1918 B.A.R.

　ブローニングオートマティックライフル(BAR)は、米軍の自動小銃の系列であり、20世紀にアメリカや多数の諸国で用いた軽機関銃である。BARシリーズの主要な派生型はM1918で、.30-06スプリングフィールド銃のカートリッジ用の薬室を持ち、ジョン・ブローニングが1917年に設計した。
　BARは前進する歩兵が運べるように設計された。肩から吊るして腰だめで射撃を行う「歩行射撃」と呼ぶ概念が塹壕戦で、個々の兵士に必要だと思われた。実際に、BARは軽機関銃として用いられ、二脚（後期型から導入）で射撃を行なった。オリジナルのM1918版は.30-06スプリングフィールド銃のカートリッジの最軽量マシンガンであり続けたが、標準の20発マガジンの容量限定がその役割での用途にネックとなった。
カートリッジ…30-06スプリングフィールド(7.62x63mm)(M1918,M1912,M1918A1,M1918A2)
有効射程……90-1350m　照準調整
装弾システム…20発入り着脱可能ボックスマガジン

■ M1919A6 LMG

　M1919A6軽機関銃は、重いM1919A4機関銃を軽機関銃にするために銃床とより軽量な銃身（3.2kg→1.8kg）を装着したものである。A6は実際には三脚（15kg）を着けていないA4より重かったが、二脚により展開が早くなり、機関銃班から兵士一名（三脚運搬手）を削減できた。
カートリッジ…30-06スプリングフィールド(7.62x63mm)(M1918,M1912,M1918A1,M1918A2)
有効射程……1370m　（最大有効射程）
装弾システム…250発ベルト

■ U.S. Heavy Weapons

■ M1A1 Bazooka

「バズーカ」は携帯無施条対戦車兵器の一般名で米陸軍に広く行き渡った。バズーカは歩兵戦闘で用いられたロケット推進対戦車兵器の第1世代になる。推進方法として固形ロケットエンジンを採用したことで、榴弾(HE)および成型炸薬弾対戦車(HEAT)弾頭を装甲車両、機関銃座、トーチカに対し普通に手榴弾や地雷を投げつける範囲よりも遠くへ発射することが可能になった。M1A1モデルはオリジナルのM1バズーカの電気系統を改良し設計を簡略化した。前方ハンドグリップがなくなり、M6A1ロケットを使う。

備考：ver2.10以降、バスーカのような軽量対戦車兵器は全て建物から発射できるが、ほとんどのタイプは噴射炎で所持者が抑圧状態になり、時には軽傷を負う。PIATにはこの問題はない。

■ M9A1 Bazooka

M9A1モデルは、1944年までに初期のM1、M1A1、M9型と代替し、その特徴は光学照準器、発射筒の強化、半分になって携行を容易にする分解できること、電気点火が磁力トリガーに交換されたことである。

■ M1919A4 Medium Machinegun

M1919A4 中機関銃は30口径の中機関銃で軽歩兵用、同軸機銃搭載用、航空機用、対空機関銃用として米軍や多くの他国で使用された。M1919は第一次世界大戦時の米軍機関銃の標準であるブローニングM1917の空冷方式に開発したもので、ジョン　M．ブローニングが設計した。

中隊もしくは大隊支援火器としてM1919は少なくとも２人機関銃班が必要だった。しかし、実際には通常、機関銃手（銃を発射し前進時には脚部と弾薬箱を運ぶ）、補助機関銃手（弾薬装填を補助し銃と交換部品と道具の箱を運ぶ）、弾薬運搬員2名の計4名いた。

備考：ゲーム中では、M1919A4 中機関銃は「展開」や「半展開」状態で射撃可能である。

M1919A4中機関銃の重量は14kgで、通常軽量の歩兵用低姿勢三脚架に装着していた。車両固定銃としても用いられた。第二次世界大戦中には、ジープ、装甲兵員輸送車、水陸両用車両に幅広く搭載されている。M1919A4は第二次大戦の米軍歩兵中隊の主要な火力の役割を担っており、他国の軍と異なって、基幹ユニットに加えて重火器小隊を持つのが通常であ

った。重火器小隊にM1919A4があることで、突撃時や防御時のいずれでも、中隊長が中隊レベルで自動火器支援を行なえるようになった。

■ M1917A1 Browning heavy machinegun

M1917ブローニング重機関銃はベルト給弾、水冷式の機関銃でかなり軽い空冷式のM1919ブローニングと共に制式化された。本銃は大隊レベルで用いられた。M1917A1モデルはオリジナルの第一次世界大戦時の設計を見直し、様々な改良がなされて近代的なWW2銃弾を使用することになった。

■ M2HB Browning heavy machinegun

M2機関銃は、ブローニング50口径機関銃ともいい、第一次世界大戦の末期にジョン　M. ブローニングが設計した重機関銃である。ジョン．ブローニングが以前に設計したM1919機関銃とたいへん良く似ているが、それは.30-06カートリッジ用の薬室だった。M2は、より大型でより強力な.50BMGカートリッジを使い、それが銃自体の名称にもなった（BMGとは、ブローニングマシンガンを表す）。M2は「メドゥーサ」や、その口径である「50」とも呼ばれていた。

本ゲームでは、M2HBは多数の米軍車両に搭載されており、また米軍空挺部隊の中には三脚に取り付けて使用しているものもある。

■ 57mm L/50 M1 Anti-tank Gun

米陸軍は、オードナンス QF 6ポンド砲、すなわち第二次世界大戦中期の英軍主力対戦車砲を、主としてレンドリース生産で採用した。米軍版は、57mmM1砲とされ、６ポンドMk2を元にしたが、より長いL/50砲身を使用した。製造は1942年早々に始まり、1945年まで続いた。　米軍の砲弾設計と製造は、砲が制式採用されたにもかかわらず遅れたため、最初は徹甲弾しか使えない。

■ 76mm L/50 M5 Anti-tank Gun

3インチM5砲は、T9対空砲の3インチ（76.2mm）砲身を105mmM2榴弾砲の部品と組み合わせている。M5は、1943年当初に米陸軍の駆逐戦車大隊に独占的に向けられた。M5は初期の米軍制定対戦車兵器を凌駕したが、重量過大と砲弾関連の問題のため効果的な使用が妨げられた。

■ 60mm Mortar M2

M2迫撃砲は、米軍が第二次世界大戦時に使用した滑空砲身、砲口装填式、高射角の兵器である。米軍60mM2迫撃砲は中隊レベルの支援火力に、より重い81mmM1迫撃砲から軽量に使えるものを供給するために開発された。四角の底盤に載せた無旋条の金属筒と、それを支える簡素な二脚の支持から構成されている。撃針は砲身の底に固定されており、砲弾が砲身に投下されたときに自動的に着火するようになっている。軽迫撃砲として分類されているものの、M2は他国のほとんどの50mmや60mmの迫撃砲に比べてかなりの射程を持ち、固定撃針設計により訓練された兵士は高い発射速度が可能になった。
発射速度…… 18発/分

■ 81mm Mortar M1

M1は米軍の標準的81mm口径の迫撃砲である。フランスのストークブラン社の迫撃砲が元になっている。M1はWP弾（白リン弾）が発射可能で煙幕弾を張るように設計されているが、対人および焼夷用の兵器であることは明らかである。

備考：本ゲームでは、白りん弾の衝撃で、近いユニットは損傷する可能性がある。

発射速度…… *18*発/分（持続）
…… *30 - 35*発/分（最大）

■ German Wehrmacht

■ Tanks

■ Panzer IVG (late)

Panzerkampfwagen IV (Pz.Kpfw. IV)はⅣ号戦車として知られており、1930年代後半に開発された中戦車で第二次世界大戦で広く用いできた。その制式番号はSd.Kfz. 161である。歩兵支援戦車として開発されたが、すぐにⅣ号戦車は旧型となりつつあるⅢ号戦車の戦車戦闘の役割を担うようになった。第二次世界大戦でもっとも多く生産され配備されたドイツ軍戦車であるⅣ号戦車は、駆逐戦車や自走対空砲を初めとする他の戦闘車両の車体としても使われた。堅固で信頼でき、ドイツ軍のいる戦場全てで兵役につき、1936年から1945年まで戦争中に8800両以上、ずっと生産が続けられた唯一のドイツ軍戦車であることが卓越さを持っている。改良と設計変更が新型連合軍戦車の登場に対応してたびたびなされ、兵役期間を延ばした。一般的にⅣ号戦車の装甲は増加されるか火器を増強するかで、戦争の最後の月日にもドイツ軍の早急な損害補充の必要性の圧力にもかかわらず、旧式なるが故の限度を含む設計変更による単純化で生産性の向上になった。

新しい長砲身KwK 40 L/43砲を受け取ったF型はF2型(制式番号Sd.Kfz. 161/1)と命名された。戦車の重量は23.6トンに増加した。生産開始から3ヵ月後、Ⅳ号戦車F2型はG型と名称変更された。F2型とG型初期にはほとんど違いがない。

G型は動力砲塔と前面装甲80mmが特徴で、実際には50mm基板に30mm追加装甲板がボルト装着されている。車体前面と車体側面の不完全な溶接のためにときおり装甲の不具合が起こった。

装甲……10-80mm

Panzer IVG (latest)

1943年4月、KwK 40 L/43砲はより長砲身の75mmKwK 40 L/48砲に置き換わり、マルチマズルブレーキに設計しなおして再装填効率を改良した。

Panzer IVH (early)

次の形式である、Ausf.H 型は1943年8月に生産が始まり、Sd.Kfz 161/2 の制式名称がつけられた。この形式は車体前面装甲を80mm の一枚装甲に改良した。ドイツ軍は連合軍による対戦車磁気地雷の大量使用を恐れていて、対戦車磁気地雷の固着を防ぐためにツィメリットコーティングが戦車の垂直面全てに施された。

さらに、本車両は、側面に5mmのシュルツェンと砲塔に8mmのシュルツェンが追加されている。砲塔上部の装甲は16mmに強化された。

Panzer IVH (late)

Ⅳ号戦車H型の後期型と初期型の相違点は、やっと車体前面を車体側面とインターロック接合し、初期の欠陥を修正したことである。

Panzer IVJ (early)

H型で機動性の問題に処置を行なったものの、Ⅳ号戦車の最終生産型であるAusf.J型はH型の省略型とみなされていた。ドイツ軍は大損害を補う必要が生じ、生産速度を上げるために、かなり簡略化された。砲塔旋回動力の電気モーターは取り除かれたため、人力で砲塔を回さなくてはならなくなった。しかしエンジンに修正を施し、車体と砲塔上部の装甲を強化している。

■ Panzer VD Panther (late)

パンターは第二次世界大戦中の1943年中期から戦争終了までドイツが投入した中型戦車の共通名である。パンターの火力、機動性、防御力の優れた組み合わせは他国の戦争後期および戦争直後の戦車設計の指針となり、また第二次世界大戦の最優秀戦車設計の一つとして良く名が挙がっている。

1944年まで、Panzerkampfwagen Vパンターとして設計され、制式番号はSd.Kfz. 171だった。1944年2月27日、ヒトラーはローマ数字のVを名称から削除するように命じた。

パンターは様々な要求の妥協である。より良い前面装甲、より良い主砲貫通力を持つティーガーと基本的に同じエンジンを共有している一方で、全体的に軽量ゆえに速く、ティーガーよりも荒れた地形で良好に運用でいた。犠牲になったのは側面装甲である。パンターは平地で長距離から撃てるので強力だが、近距離戦闘ではもろいことも明白になった。また75mm砲はティーガーの88mmよりわずかに小さい砲弾を発射するため、歩兵に対する榴弾の威力が少し劣っている。パンターはティーガーよりもかなり安く製造できⅣ号戦車よりわずかに高いだけだった。

パンターⅤ号戦車D型（後期型）は次のような特徴がある。

……主砲弾79発
……砲塔前面装甲100mm
……表面硬化傾斜(車体前面上部)装甲
……63mm表面硬化(車体前面下部)装甲
……上部側面装甲40mm40°
……車体側面は表面硬化
……16mm車体上面装甲
……30mm車体底部装甲
……前部機関銃が郵便箱型
……最大速度55km/h
……690馬力エンジン

■ Panzer VA Panther (early)

パンターⅤ号戦車A型（初期型）とD型（後期型）の相違点は、次のとおりである。

……砲塔旋回速度向上
……戦車長キューポラ改善
……装填手用ペリスコープ追加
……110mm砲塔前面装甲
……傾斜(車体前面上部)装甲が表面硬化されなくなった。
装甲……15-120mm

■ Panzer VA Panther (mid)

パンターⅤ号戦車A型（中期型）と（初期型）の相違点は、次のとおりである。
……車体前面機関銃が「ボールマウント」型
……エンジン回転数制御により600馬力に低下したため、最大速度が46kmに低下
……エンジン出力低下のため、砲塔旋回速度がわずかに遅くなった。

■ Panzer VA Panther (late)

パンターⅤ号戦車A型（後期型）と（中期型）の相違点は、次のとおりである。
……砲手の照準器がわずかに性能向上
……近接防御武器を搭載

■ Panzer VG Panther (early)

パンターⅤ号戦車G型（初期型）とA型（後期型）の相違点は、次のとおりである。
……主砲弾82発
……傾斜装甲板にたまに不良製造品があった
……車体前面下部が50mmに、表面硬化はされなくなった
……車体上部側面装甲が50mm、傾斜30度
……車体側面装甲の表面硬化はされなくなった
……車体上面装甲40mm、車体底面装甲25mm

■ Panzer VIE Tiger (mid)

ティーガーⅠ戦車は、Panzerkampfwagen Tiger Ausf. Eが正式名称で、バルバロッサ作戦の初期の数ヶ月に遭遇した予期せぬソビエト軍の強力な戦車に対抗して1942年に開発された。ティーガーⅠ戦車は、88mm砲を搭載した国防軍の初の戦車で、同砲は対空・対地共にその有効性を既に発揮していた。

ティーガーⅠ戦車は多くの敵に恐れられたが、過剰品質であり、高価で手間がかかる部品と生産方法を用いているので、生産に時間がかかった。1942年8月から1944年8月までに1347両のみが製造された。ティーガーは、ある種のキャタピラ不良を起こしやすく機動に問題があったが、全般的には機械的信頼性は高かったものの、千鳥足転輪のためにメンテナンスが高価で輸送も手間がかかった。

装甲……25-100mm

■ Panzer VIE Tiger (late)

最終生産型は近接防御武器を搭載し、上面防御装甲を増強した。しかし、省力生産のために、装甲板の「硬度」標準が低下した。

■ Tank Destroyers

■ Marder IIIM

Marder Ⅲは、第二次世界大戦中のドイツ軍が38(t)戦車の車体を用いて製造した駆逐戦車のシリーズ名である。ドイツ語でマルダーは「テン（貂、獰猛でやせた森の動物）」を意味する。1942年から1944年にかけて生産され、終戦まで用いられた。

最終型であるマルダーⅢ M型、SdKfz.138は、38(t)戦車Ausf.Mを元として、75mmPaK 40対戦車砲を装備した。この型ではエンジンが後方から、操縦手と残りの乗員の間の中央へと移されている。後方にエンジンが無いため、砲と乗員は以前の型のよ

うにエンジンデッキの上に座らずにすみ、乗員の露出と視認性を減らした。

■ JAGDPANZER IV (EARLY)

Jagdpanzer IV、 Sd.Kfz. 162は、Ⅳ号戦車の車体を元にした駆逐戦車である。量産中にも、ずっと小改良・小改修がなされ、現地でも行なわれたが、最も一般的なのは側面シュルツェンの追加である。初期生産型は60mmの車体前面上部装甲と30mmの車体側面装甲が特徴である。車体MG42機関銃は装填手（もしくは、指揮型の場合には追加された乗員）が操作した。

装甲……10-80mm

■ JAGDPANZER IV (MID)

Ⅳ号駆逐戦車（中期型）は、操縦手のMP44射撃孔が取り除かれている。

■ JAGDPANZER IV (LATE)

Ⅳ号駆逐戦車の最終生産型は車体前面上部装甲が80mmに、車体側面装甲が40mmに増強され、「近接防御兵器」が追加された。装甲増強に伴い、わずかに重量バランスが前方に偏り、操作性が少々低下した。

■ Self-propelled Assault Guns

■ StuG IIIG (early)

Sturmgeschuetz Ⅲ（StuG Ⅲ）突撃砲はⅢ号戦車のシャーシを使用し、第二次世界大戦で最も生産台数の多い装甲戦闘車両であった。元々は、歩兵直協支援用の機動装甲歩兵砲を目的としていたが、StuGは常に改良されて戦車駆逐車として広く使われるようになった。

StuGシリーズの最終型で最も一般的なものがStuG Ⅲ Ausf.G (Sd.Kfz 142/1) だった。Ausf.G は、Ⅲ号戦車M型の車体を用いて、上部構造の新設計を行なった。初期生産型は、「箱」型砲基部の厚さが変化していて（45mmから50mmの間）、ペリスコープ付き車長キューポラ、装填手の操作する防盾付き上部搭載MG34が特徴である。

装甲……16-80mm

■ StuG IIIG (mid)

1943年11月以降のG型は、独：Topfblende：「釜の砲盾」：戦後には独：Saukopf：「ブタの頭」）と呼ばれる主砲鋳造防盾を取り付けたが、同軸機関銃はなかった。この丸みを帯びた鋳造防盾は「箱」型防盾よりも兆弾に有効であった。

■ StuG IIIG (late)

最終型の特徴は、再び「箱」型防盾（一時期に二種類の防盾あり）が採用されたことである。同軸機関銃が1944年6月から追加された。上部のMG34機関銃はリモートコントロールのMG42に換装された。前面装甲は表面硬化されておらず、全般的な装甲製造品質は良い。

使用可能時期……1944年8月

StuH 42 (Early)

1942年、7.5cmStuK 40 L/43カノン砲の代りに105mm榴弾砲を搭載したStuG Ausf.F の派生型が設計された。この新型車両は Sturmhaubitze 42 Sd.Kfz 142/ 2と命名され、StuG Ⅲ Ausf.F/8と Ausf.G の対戦車任務の数が増加したために、歩兵支援を目的として開発された。StuH 42 は、10.5cm leFH 18 軽榴弾砲を電気着火式に改修し、マズルブレーキを取り付けたものを装備していた。

初期型は、Ⅲ号G型突撃砲（初期型）に相当する「箱型」砲盾を使用した。

装甲……16-80mm

StuH 42 (Mid)

初期型以降は、StuG Ⅲ Ausf.FやStuG Ⅲ Ausf.F/8、Ausf.G の車体を使用した。中期生産型は、Ⅲ号G型突撃砲（中期型）に相当し、丸みを帯びた「ザウコップ」主砲防盾を用いた。

Armored Cars

PSW 222

Leichter Panzerspahwagenは、1935年から1944年に製造された一連の四輪軽装甲車両である。スタンダードのsPkw Ⅰ Horch 801の車体に傾斜装甲と砲塔を取り付けた。

Sdkfz.222 型は、2cm KwK 30 L/50 機関砲と7.92mm MG34機関銃を装備している。3人目の乗員は砲手である。

装甲……5-14.5mm

PSW 223

Sdkfz.223 Panzerfunkwagen は、無線車型で、7.92mm MG34機関銃を装備している。追加の無線装置を搭載し、大型の「ベッド・フレーム」アンテナが車両の上にある。

装甲……5-14.5mm

PSW 234/1

Schwerer Panzerspahwagen（重装甲偵察車両）は、ドイツ軍が第二次世界大戦で用いた六輪ないし八輪の装甲車両である。SdKfz 234（特殊用途車両234）は、八輪装甲車である。234/1 はオープントップの砲塔が特徴である。約200両が生産された。

装甲……9-30mm

PSW 234/2 Puma

234/2 プーマは、完全密閉砲塔を採用した。砲塔前面は30mmの装甲が垂直面から20度の角度でついている。側面と後部には、10mmの装甲が25度の角度でつき、天井は10mmの装甲である。砲基部は丸みを帯びて40-100mmの厚さがある。101両が1943年9月から1944年9月までに生産された。

装甲……9-30mm

■ HALFTRACKS

■ SPW 250/1

SdKfz.250 は、デマーグ社が製造した軽装甲ハーフトラックである。米軍のものと比べSdKfz.250は、前輪が駆動しないために機動性に劣る。しかし、キャタピラのおかげで、置き換えられた装甲車よりは、はるかに良好な機動力を持ったので普及車両となったのである。ほとんどの派生型はオープントップで出入り口は後方のドアだけであった。SdKfz.250は1939年に採用されたが生産が遅れ、1941年中期まで最初の250両は登場しなかった。SdKfz.250/1 軽装甲車両(SPW)は標準的な兵員輸送車である。

装甲……5.5-14.5mm

■ SPW 250/3

SdKfz 250/3 leichter Funkpanzerwagen は、250の指揮型であり、無線装置と「寝台」型空中線が装備されている。

■ SPW 250/9

Sd.Kfz. 250/9 leichter Schutzenpanzerwagen (2 cm)は、2cm KwK38自動機関砲と同軸機関銃のMG34またはMG42を装備した偵察車両で、オープントップの砲塔はSdKfz222（初期型）SdKfz234/1（後期型）と同じである。

SPW 250/10

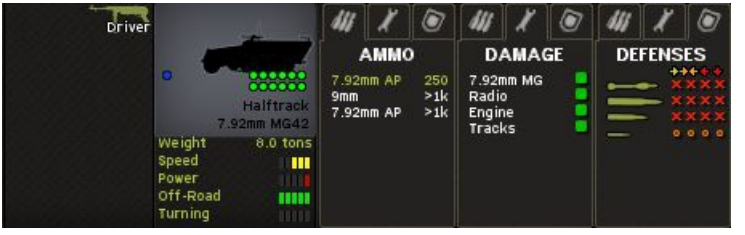
SdKfz 250/10 leichter Schuetznpanzerwagen (3.7cm PaK) は、偵察小隊指揮官用で、3.7cm PaK 35/36が装備している。同砲は、戦争初期に牽引状態で用いられた対戦車砲と同じである。

SPW 251/1 (Ausf. D)

Sd.Kfz. 251 (Sonderkraftfahrzeug 251)ハーフトラックは、ハノマーグ社が設計し、最初に製造した装甲戦闘車両である。戦時のハーフトラックとして最も普及し最良の装甲ハーフトラックであるSdKfz251は、ドイツ軍機械化歩兵部隊の装甲擲弾兵を輸送するために設計された。ドイツ軍と連合軍ともに「ハノマーグ」として広く知られ、戦争中ずっと15252両を超える車両と派生型が様々な工場で生産された。

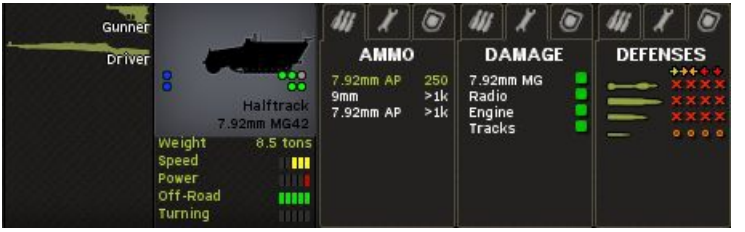
SdKfz251/1 Schutzenpanzerwagenは、標準的な兵員輸送車である。

装甲……6-14.5mm



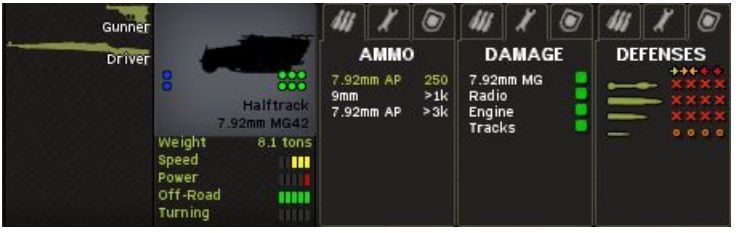
SPW 251/3 (Ausf. D)

Sdkfz 251/3 - mittlerer Kommandopanzerwagen (Funkpanzerwagen)は、通信車両で、指揮官用の特別な無線機器を搭載している。



SPW 251/7 (Ausf. D)

SPW251/7-I　Pionierpanzerwagen（戦闘工兵車両）は突撃工兵車両で両側に突撃橋ランプを装着している。



SPW 251/9 (Ausf. D) Stummel

Sdkfz 251/9 - Schutzenpanzerwagen (7.5 cm KwK37)は、75mm L/24低初速砲を装備しており、「シュツンメル」（スタンプ）の愛称がつけられた。

SPW 251/10 (Ausf. D)

Sdkfz 251/10 - Schutzenpanzerwagenは、37mm PaK36対戦車砲を装備している。

Unarmored Vehicles

Kübelwagen Utility Vehicle

Volkswagen Kubelwagen（略してKubelsitzwagen、「バケットシート自動車」という意味）は、フェルディナント・ポルシェが設計、フォルクスワーゲンが生産し、ドイツ軍が使用した軍用車両である。フォルクスワーゲン・ビートルのかなりの部分をベースとしていて、キューベルワーゲンは、ドイツ軍にとって連合軍のジープにあたるものだった。

Opel Blitz Truck

Opel Blitz は、オペル社が1930年から生産したさまざまなドイツ軍軽～中型トラックに与えられた愛称である。第二次世界大戦に先立つこと数年、オペル社はドイツの最大トラック製造会社だった。ブリッツの名前は、1930年にオペル社のトラックに初めて採用され、1934年までに四つの基本バージョンがあった。１トンモデルはより大型の2/2Ωトントラックの14種類の一つである。３トントラックは1939年に導入されて、戦争中ずっと使用された。

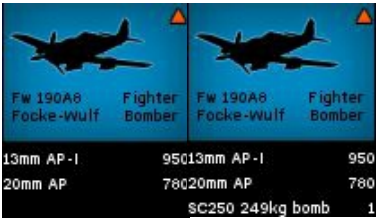
■ German Air Assets

■ Focke-Wulf 190A8

フォッケウルフ Fw190 Wuerger (Shrike)は、クルト・タンクが1930年後半に設計したドイツ空軍の空冷エンジン単座戦闘機である。第二次世界大戦中、様々な任務でドイツ空軍に使用された。メッサーシュミットBf109のように、Fw190は「軍馬」として用いられ、制空戦闘機、襲撃戦闘機、地上攻撃機と幅広い任務に適していることを証明し、夜間低空戦闘機の作戦行動も行なった。

Fw190 A8 は1944年8月に生産された。本ゲームでは二種類の武装が可能である。

武装……機銃掃射、小型爆弾

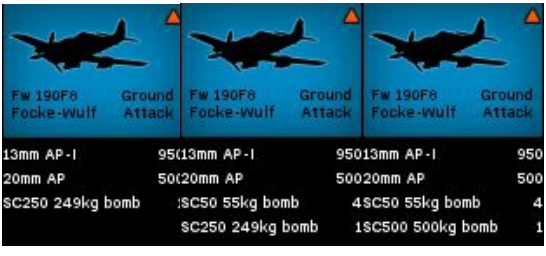


■ Focke-Wulf 190F8

Fw190 F8のA8型と異なる点は過給器の排管を少し改良したことであり、数分間、低高度での性能が向上した。F8型は改良FuG16ZG無線機を装備したため地上戦闘部隊との交信がかなり改善された。Fw190 F8の武装は、翼の付け根の20mm MG151/20機関砲2門とエンジン上部の13mmMG131機関銃2丁である。

本ゲームでは三種類の武装が可能である。

武装……小型爆弾、大型爆弾、最大積載



■ German Artillery Assets

備考：sGrW34中迫撃砲、LeIG18歩兵砲、sIG33歩兵砲およびFlak34対空砲はオンマップとオフマップ両方で使用可能であり、また「重火器」で説明します。

sGrW42 120mm Mortar

Granatwerfer 42 (文字は「擲弾投射機42型」;制式名称: 12Cm GrW 42）は、1941年に開発された。いつでも一般的に使用している迫撃砲よりも強力な性能の近接支援兵器をドイツ軍歩兵に与えようとしたのである。本兵器は東部戦線でソビエト軍が使用したPM38のコピーだった。

FK38 75mm Howitzer

7.5cm Feldkanone 38 は、クルップ社が製造した野戦砲であった。
発射速度……8-10発／分

leFH18M 105mm Howitzer

10.5cm leFH 18M（軽野戦榴弾砲）は10.5cm leFH 18に代って第二次世界大戦中に用いられた標準的ドイツ軍師団野戦榴弾砲である。戦争勃発後に、基本的なleFH 18の設計を、もっと射程を伸ばすようにラインメタル社が設計･開発を行なった。マズルブレーキを装着し、駐退復座機をもっと強力な火薬の新型長距離弾を使用できるように調整した。
発射速度……4-6発／分

sFH18 150mm Howitzer

15cm schwere Feldhaubitze 18(「重野戦榴弾砲18型」)は、第二次世界大戦中、ドイツ軍の基本的な師団レベルの重榴弾砲だった。
発射速度……4発／分

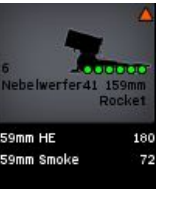
K18 170mm Gun

17cm Kanone 18M in Moerserlafette は、ドイツ軍の重砲であり、軍団レベルで長大距離の対砲兵射撃の支援に用いることを目的としていた。技術的には優れた兵器でしたが、高価であり、操作が難しく、設置と分解に非常に時間がかかった。前進する連合軍に捕獲されないように放棄した際、多数が失われた。

Mrs18 210mm Howitzer “Brummbär”

21cm Moerser 18M (臼砲) は、ドイツ軍の臼砲であり、独立砲兵大隊および中隊で用いできた。ユニークな二重駐退復座機を用いた最初の兵器の一つである。砲身は、通常、揺架の中で衝撃吸収するが、それに加えて、砲身と揺架を運搬している砲架の上部全体を砲架の主要部分越しに衝撃吸収している。本装置は後座力を緩和し、非常に安定した火力基盤になった。

15cm Nebelwerfer 41



Nebelwerfer(「煙幕迫撃砲」、文字の意味は「霧投射機」)が、最初に開発し割り当てられたのは国防軍の通称、化学部隊(Nebeltruppen)だった。名称は、煙幕迫撃砲が主任務を示唆しているようだが、高性能炸裂弾が当初から開発されていた。

部隊に初めて与えられた兵器は、1940年の15cm Nebelwerfer 41 でガス、煙幕、高性能炸裂弾頭が設計された。ドイツ軍の全てのロケット弾設計と共通して、正確性を増すためスピン方式だった。3.7cm PaK 36 に用いられた牽引式砲架に装着した6本の発射管から発射を行い、射程は6900mだった。

21cm Nebelwerfer 42

21cm Nebelwerfer 42 ロケット砲は、1942年に導入され、小型の15cm ロケットに比べ長射程(7850m)で簡素な設計だった。高性能炸裂弾のみである。小型のロケット兵器と同じ砲架を用いた5本の発射管から打ち出された。

28 cm Nebelwerfer 41

28cmネーベルヴェルファー41型ロケットは1941年に導入された。各ロケットの最大射程は2200メートルしかなく、戦術的制約が大だった。木製ケースや特別木製もしくは筒型金属フレームから発射でいた。後にロケット6発の牽引ランチャーが開発された。

30 cm Nebelwerfer 42

ドイツ軍が最後に設計・導入したロケット兵器が、30cmネーベルヴェルファー42型ロケットである。これは射程が短すぎると明らかになった28／32cmを更新するのが目的だった。推進化学剤の進化で煙も低下した。ガイドレールを装着することにより旧式のロケットと同じランチャーから発射可能だったが、専用のランチャーであるラケッテンヴェルファー56もあった。

■ German Weapons

■ P38

ワルサーP38は第二次世界大戦開始時に国防軍制式ピストルとしてワルサー社が開発した9mmピストルである。高価なルガーP08を更新するためだった。
カートリッジ……9mmx19mm　パラベラム弾
有効射程……50m　照星
装弾方式……8発入りシングルストックマガジン

■ Karabiner 98K

Karabiner 98 Kurz (Kar98k、K98、K98kとも略される)は、1935年に標準銃としてドイツ陸軍に採用された。第二次世界大戦中セミおよびフルオートマティックライフル銃が補充されたが、戦争終結までドイツ軍制式銃として残り続けた。
カートリッジ……7.92mmx57mm
操作……ボルトアクション
有効射程……500m　照星
……800m+　光学照準器
装弾方式……5発入り着脱可能クリップ内部マガジン

■ Kar98K Schiessbecher

1942年、30mmシーズベッヒャー・カップ型ライフルグレネードランチャーが導入された。カルビナ98Kに装着でいた。ライフルグレネードランチャーは280mまでの対歩兵、陣地、軽装甲車両に使用できた。異なる特殊擲弾に専用特殊推進カートリッジが開発されてシーズベッヒャー・ライフルグレネードランチャーは1,450,113器製造された。

■ Kar98K Zf/4

狙撃兵用に、工場テストで非常に精確なカルビナ98Kライフルを選別して望遠照準鏡を装着したものである。カルビナ98K狙撃ライフルは熟練者が使用すると有効射程が1000mに及ぶ。ドイツ軍のツワィス・ツィールフィアZF39は弾道落下目盛が50m間隔で100mから800mの射程である。型によっては100mから1,000mのものもあった。
有効射程……800m+（照準器付き）

■ Gewehr 43

ゲーヴェル43もしくはカルビナ43（G43、K43、Gew43、Kar43）はセミオートマティックライフルである。大量生産や一般使用などはされなかった。遅いボルトアクションライフルよりも有効な戦闘ライフルでありながら、ゲーヴェル43は信頼されず、米軍M1ガーランドのような連合軍ライフルほど明確かつ単純ではなかった。
カートリッジ……7.92mmx57mm
操作……ボルトアクション
有効射程……500m、照準器付きで800
装弾方式……10発入り着脱可能ボックスマガジン

■ Gewehr 43 Zf/4

G43/K43は、マークスマンや、狙撃兵用武器として用いられ、光学4倍率のZielfernrohr 39（ZF4）望遠照準鏡を装着していた。
有効射程……500m、照準器付きで800

■ MP40

MP40は、連合軍が兵器設計者のヒューゴ・シュマイザーから「シュマイザー」と呼ばれるが、シュマイザーはMP40を設計しておらず、マガジンの特許を持つだけである。
カートリッジ……9x19mm　パラベラム弾
有効射程……100m
装弾方式……32発入り脱着可能ボックスマガジン

■ MP44

StG 44 (Sturmgewehr 44すなわち「突撃」銃44型（1944年型）)は、多くの歴史家が主要な軍事国家で最初に大量配備された近代的突撃銃だと考えている。
本銃は薬室が7.92x33クルツ弾用になっており、ドイツ軍の標準ライフル弾の短いものである。この銃弾とStG 44の射撃選択設計の組合わさったことにより、近距離では、正確なサブマシンガンの火力を、中距離ではKar98の威力を発揮することができた。
カートリッジ……7.92x33クルツ弾
有効射程……300m
装弾方式……30発入り脱着可能ボックスマガジン

■ MG34

MG34機関銃は1934年に初めて生産され制式採用された。空冷式機関銃で、7.92x57mmマウザーカートリッジで射撃を行う。軽機関銃として使う場合のために二脚が装備され、50発入りのベルト給弾マガジンをレシーバーに装着する。
カートリッジ……7.92x57mmマウザー
装弾方式……50発ベルト、50発ドラム

■ MG42

MG42機関銃は、軽機関銃として使う場合、二脚付きで11.6kgとMG34より軽く、容易に運べた。二脚はMG34と同じもので、用いられる場所に応じて銃の前方もしくは中心に装着された。
カートリッジ……7.92x57mmIS
装弾方式……50発もしくは250発ベルト

■ PANZERFAUST 30K

パンツァーファウスト（「装甲の拳」「戦車の拳」の意味）は安価な、無反動のドイツ軍の対戦車兵器である。小型で使い捨ての発射管に前もって装填した高炸裂対戦車弾頭からなり、兵士一人で操作を行なった。
パンツァーファウスト30クライン(小型)、もしくはファウストパトローネが原型で1943年8月に最初に配備され、総重量は3.2kg、全長は98.5cmであった。「30」は通常の最大射程が30mであることを表す。直径3.3cmの発射管には推進力として54gの黒色火薬が含まれており、400gの炸薬がある10cmの弾頭を発射する。ちょうど秒速30mで飛行し、140mの装甲を貫通できた。

■ PANZERFAUST 30

1943年8月に改良型が登場し、より大型の弾頭で装甲貫通力が200mまで向上したが射程は同じ30mであった。

備考：ver2.10以降、パンツァーファウストのようなロケット軽量対戦車兵器は全て建物から発射できるが、ほとんどのタイプは噴射炎で所持者が抑圧状態になり、時には軽傷を負う。

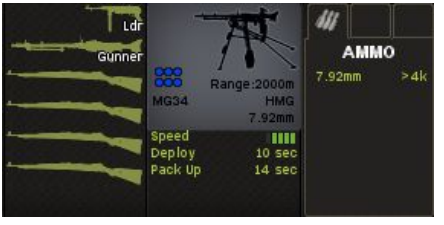
■ German Heavy Weapons

■ Panzerschreck

パンツァーシュレックはラケッテンパンツァーピッシェ（略称RPzB）の一般名で、繰り返し使える88mm口径の対戦車ロケットランチャーである。別の一般名はオッフェンロール(煙突)だった。パンツァーシュレックは歩兵用軽量対戦車兵器として開発された。この兵器は肩に担ぎ、ロケット推進で安定尾翼がある尖鋭弾頭榴弾を発射する。生産量はパンツァーファウストよりかなり少ない。
有効射程……150m(RPzB54)

■ MG34 Heavy Machinegun

MG34重機関銃は1934年に初めて生産され制式採用された。空冷式機関銃で7.92x57mmマウザーカートリッジで射撃を行う。軽機関銃としても重機関銃としても使えるように設計されている。重機関銃の場合、大型の三脚に載せベルト給弾した。軽機関銃としては6.75kgの二脚に載せた。大型の三脚は23.6kgのMG34ラフェッテで、光学照準器や間接射撃要の特殊照準器など多くの特徴がある。
カートリッジ……7.92x57mmマウザー
給弾方式……50/250発ベルト、50発ドラム、MG34専用75発ダブルドラム



■ MG42 Heavy Machinegun

MG42重機関銃は1942年に国防軍に採用された。ドイツ軍装甲部隊のMG34汎用機関銃を補完しある意味では代替したが両機関銃とも戦争終了まで製造、使用された。MG42は信頼性、耐久性、シンプルさ、操作の容易さが明らかだが、制圧射撃時につんざくような音を立てることでもっとも有名となった。毎分1200～1500発は個人で運ぶことができる単一銃身の最高速射撃のひとつであり、閃光がめだつ結果にもなった。MG42のベルト給弾と迅速な銃身交換方式も他国の同様な武器と比較して長時間の射撃を可能にしている。

持続射撃に用いられたのは、新開発のラフェッテ42三脚で20.5kgの重量である。MG42の持続的射撃に最適な操作人員は6名だった。指揮官、射撃手、三脚運搬手、弾薬、交換銃身、陣地用工具他の運搬手3名である。
カートリッジ……7.92x57mmマウザー
有効射程……1000m
給弾方式……50/250発ベルト

sGrW34 8cm mortar

sGrW34 8cm迫撃砲は第二次世界大戦中を通じてドイツ軍の標準的中型迫撃砲だった。かなりの命中精度と発射速度で名声を博したが、その信頼性の大半は操作兵の訓練とするべきであろう。兵器設計はありきたりのもので、運搬用に三つの部品（砲身、二脚、底盤）に分解できた。砲身は無旋条である。広角照準器が微調整用の多角測量機器の上に装備されていた。筒にある線はおおよその射撃に用いられた。
発射速度……15-25発／分

leIG 18 (7.5 cm)

7.5cm leichtes Infanteriegeschutz 18(7.5cm le.IG18)はドイツ国防軍が使用した歩兵砲である。山岳歩兵や空挺部隊用の派生型もあり、それらは運搬用部品に簡単迅速に分解できた。
発射速度……8-12発／分

sIG 22 (15 cm)

15cm sIG33(schweres Infanterie Geschuets 33)は、ドイツ軍が第二次世界大戦で使用した標準的重歩兵砲である。歩兵砲としてはどの国よりも最大である。
発射速度……2-3発／分

■ 5 cm PaK 38

5cm Panzerabwehrkanone 38 (L/60)は、ドイツ軍の50mm口径の対戦車砲である。1938年、37mmPak36の後継としてラインメタル＝ボルズィッヒ AG が開発した。

■ 7.5 cm PaK 40

7.5cm Panzerabwehrkanoneは、1931年から1941年にラインメタル社が開発したドイツ軍の対戦車砲であった。Pak 40 は、第二次世界大戦後期のドイツ軍対戦車砲の骨幹をなした。本兵器は、戦争終了までほぼ全ての連合軍戦車に対して有効だった。Pak 40 は、Pak 38 よりかなり重く、機動性が低下し柔らかい地面では砲牽引車がなければ地点に移動するのが困難あるいは不可能だった。

■ 7.62 cm PaK 36(r)

7.62 cm Panzerabwehrkanone 36(russisch)は、ソ連製76.2mm M1936(F-22)師団砲を改造したものである。戦争序盤に、ドイツ軍は同兵器を大量に捕獲した。対空能力を念頭に開発されたため、同兵器は、優れた弾道性能があった。1941年後半に、ドイツ軍技術陣は近代化を施して、より強力な砲弾用に薬室を拡大、駐退復座機を改良した。砲弾は新しくなり、砲盾を低くし、多く（全てではない）の砲はマズルブレーキを装着した。

8.8cm FlaK 36

88mm砲は、戦争、最も良く知られたドイツ軍兵器の一つである。Flak とは、Flugzeugabwehr-Kanone、もしくは、Flugabwehr-Kanone（ゆえに大文字のK）というドイツ語で、意味は対空砲であり、88mmの本来の使用目的である。ドイツ軍の非公式の使い方だが、同砲は一般的に、8.8cmからとったアハト・アハト(8-8)と知られている。

8.8cm PaK 43

Panzerabwehrkanone 43は、ラインメタル社のFlak41 88mm対空砲と競合したクルップ社が開発したドイツ軍の88mm対戦車砲である。一定数がある制式兵器の中で国防軍が最も強力な対戦車砲であった。Pak 43は優秀な兵器で、交戦距離において連合軍の最も強力な戦車を貫通できた。

Pak 43の主要型はとても有効な十字型砲架に載せられており、360度回転でき、かつ88mm対空砲型よりもかなり低姿勢であった。しかし、最初、この型の製造が遅いため、製造速度を上げるために、従来の榴弾砲の二輪開脚式砲架に載せられてPak 43/41として知られるようになった砲もある。

8.8cm PaK 43/41

8.8cm PaK43/41は、材料不足のため、一時しのぎに、一軸開脚式砲架に載せられて製造された。

Fortifications

Bunker

ゲーム中のバンカーは2種類あり、丸太でできた木造バンカーとコンクリートで固められたものである。後者は、永久防衛線周辺で典型的に見られ、前者は半永久的な野戦築城で用いられた。

さらに、バンカーを購入する時には、プレイヤーは非武装シェルターか、M34もしくはM42重機関銃を装備したバンカーを選択できる。たいていのバンカーは弾薬庫を備えていて歩兵ユニットが弾薬補給/調達するのに使える。

陣地は直接および間接射撃に対して優れた遮蔽効果がある。機関銃のような重火器をいくつか陣地に設置できるし、歩兵ユニットは出入りが自由だが、車両はバンカーには入れない。

Trench

塹壕は通常、半永久防御線の大規模土木防御の一部である。これによりユニットや部隊は遮蔽されながら移動でき、敵火力のほとんどに対して良い防御となるし、間接射撃に対しても一定の防御力がある。塹壕は、エディターやセットアップフェーズで近くに配置すると、線を形成するために自動的につながる。

Foxhole

タコツボは歩兵部隊が急造で穴を掘ったその場しのぎの防御構築物である。塹壕とは異なり、タコツボは通常、十分カバーできるのは歩兵の班だけである。タコツボは敵火力にかなりの掩体効果がある。

"Hedgehog" obstacles

対戦車障害物は主として戦車や他の車両が容易に突入できないように制止する目的の防御資材で、走行不可能になる危険性が極めて高い。ゲームでは、対戦車障害物は通行不可能である。

Sandbag Wall

サンドバッグは敵火力にかなりの掩体効果があるその場しのぎの防御構築物である。サンドバッグはその背後にいる歩兵と車両に、限定的であるが防御力がある。

Barbed Wire

有刺鉄線は木造構築物に有刺鉄線を組み合わせたフェンスであり、歩兵部隊を速度低下（停止ではない）を目的としている。有刺鉄線は、エディターやセットアップフェーズで近くに置くと自動的に線を形成するように連結する。

■ Mines

ゲームには対人、対戦車、混合（同じ地域に対人、対戦車の両方が組み合わさっている）の3種類の地雷がある。明らかに対人地雷は歩兵を害するのが主であり、対戦車地雷は通常大きくてもっと強烈であり、車両と戦車を使用不可能か、少なくとも走行不可能にすることを目的にしている。

備考：対戦車地雷は歩兵が徒歩で爆発させることはできないが、対人地雷は車両で爆発させることができる。

地雷原を通行する部隊は、地雷を爆発させることなく地雷に気づく能力をある程度持っている。以下の時に、その能力がより高くなる。

……兵士が這っているか、歩いている（Huntでは少し低くなる）
……兵士が工兵である
……兵士の経験値が高い
……地雷がすでに発見されている（除去など）

工兵は既知の地雷原を探知する能力がある。工兵が地雷を探知すると、他のユニットは安全に（ただしゆっくり）他の地雷を爆発させる危険をおかさずに移動できるであろう。詳細は、命令章の地雷探知を参照されたい。